

2013年度業務報告

前理事長

上 野 剛 史



昨年度、理事長を務めさせていただきました、IBMの上野です。業務報告の要約版に基づいてご報告させていただきます。

2013年度は、経済が反転したと言っていい年となりました。業務計画を立てたときには、2013年度は飛躍の年になる可能性がある、成長軌道を回復する可能性があるという指摘をいたしました。実際に終わってみると、想像した以上に反転した、そういう1年ではなかったかと思っています。今後は攻めの経営ということが行われて知的財産の重要性が益々高まることとなります。昨年度1年間、方針としまし

ては、スローガンである「世界から期待され、世界をリードするJIPA」を引き続き掲げて、それに従って3つの基本方針で活動してまいりました。

1つ目が、国内外への積極的な提案活動ということで、各国の知財制度を各会員企業にとって使いやすいものにするという活動です。2つ目が、JIPA活動の一層の拡大・グローバル化というもので、日本国内では、さまざまな地域での活動を広げていく、それから海外では代表団等の派遣などを通じていろいろな国に影響力を発揮していくというものでした。それから3つ目が、一般社団法人への移行でした。こういった3つの方針を立ててそれぞれ活動をしてきた次第でございます。

さまざまな部会、業種別部会、知的財産研究会では、地域、業種の実情に合わせた、特徴あるプログラムで活動してまいりました。地域ということでは、中国・四国・九州地区協議会が本格的に活動を開始した年でもありました。専門委員会に関していいますと、20の専門委員会で、活動をしました。昨年は国際第4委員会を新設して、ASEANの地域をカバーするというので、成長著しい、変化も激しいアジアにもより一層力を入れて活動してまいりました。

プロジェクトの活動も積極的に行ってきました。アジア戦略プロジェクトにおいて模倣品対策、それから東アジア、東南アジア対応ということで、中国、インド、東南アジア等の国に人を派遣して、意見交換、それから提言を行ってまいりました。

日中企業連携では、中国を訪問して企業レベルで活発な議論を行いました。

制度調和委員会では、三極特許庁から五極特許庁会合その他のさまざまなフォーラムで制度調和の議論が行われているなか、担当役員も3名に拡大してユーザの立場から積極的な活動してまいりました。

JIPAシンポジウムに関しては、昨年度は、ガリWIPO事務局長、それからEPOのバティステリ長官、日本特許庁の羽藤長官にもご登壇いただいて、経済連携についてのテーマを取り上げました。現在、アメリカ特許庁長官が空席であることを考えますと、世界の最高峰のリーダーである3人の方にお集

本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

まりいただいていたシンポジウムだったということで、「世界から期待され」という、JIPAのスローガンをあらわしているのではないかとも思っています。

それから、職務発明に関しては、特許庁の研究会、山本大臣のワーキンググループ、また産構審での議論を行ってまいりました。今まさに特許制度小委員会では、法改正に向けての議論が山場を迎えているという段階です。

経済タスクフォース、経済連携に関しては、シンポジウムのテーマでもあり、引き続き交渉状況を把握し発信もしてまいりました。

環境技術パッケージ推進タスクフォースでは、公式発表がスイスのジュネーブで昨年行われました。知財協が提案した環境技術移転のメカニズムで、この公式発表では、WIPOの大国際会議場でガリ事務局長が登壇して、その隣に知財協を代表して私が、反対側にスイス駐在のインド大使の方が座って3人でイベントを行うという華々しい会合で、その場では、ガリ事務局長から知財協に対する貢献について何度も言及いただくということで、知財協としても存在感を発揮できてきたと考えています。

それから、法人タスクフォースということで、法人化に向けての活動をやってまいりました。

その他審議会、提言、各国知財関係者との交流、国際会議の派遣等も行いました。

広報活動ということでは、「知財管理」誌、別冊資料を発行し、会員企業にとって有益な情報提供を行ってまいりました。ホームページ、メルマガを通じて情報発信も行い、今後ますます重要になってくる英語での発信ということで、英文メルマガの発行も昨年から行うようになりました。人材育成ということでは、会員企業の皆様の人材育成のお手伝いをすべく、より充実したプログラムのもとでさまざまな研修を行いました。

すべての項目をご紹介できず、一部だけをご紹介したことになりますけれども、ここにいらっしゃる皆様、また委員会活動をされている皆様、それから事務局を含めてさまざまな方のご尽力、それから間塚会長、高橋副会長、吉田副会長のご指導のもと、この知財協のスローガンである、「世界から期待され、世界をリードする」といったことに関して、一歩前進できたのではないかと考えているところです。

私からの報告は以上です。